



技術教育

佐々木享

ではないかと思う。

以下に、昨年度から引き継がれているおもな課題を検討してみよう。

二

技術教育の研究面には、教育の内容のみでなく教師の労働条件・施設設備の問題など他の教科にはみられないような多くの問題がふくまれてくる。このことは、全国教研に提出されるレポートの限られた紙面に、「技術教育の問題点」として多くの問題が羅列されるというかたちで現われる。各都道府県段階の集会にたくさん問題が提起されるので、それをすべて盛り込もうと努力するから、いきおい羅列になりがちだという事情もある。全国教研へのレポートの作製という技術的な問題を考えるとむずかしいのであるが、全国的な規模で実践を検証し研究成果を積み上げるといふ観点を考慮すると、レポートのおもなテーマを whichever、一つのテーマについて深くつっ込んで検討するといふまとめ方も必要なた

当然のことだが、自主的に結成されたサークルの研究や実践は、ここ数年間の技術教育の前進に大きく寄与している。その反面、とくに技術科教師の場合、いろいろな問題をかかえているためなのであるが、各都道府県のいわゆる半官製団体に帰属する傾向が強いように思われる。半官製団体は、今日ではしばしば下請け団体となつて文部教研（教育課程研究集会）をささえ、上からの統制に一役買っている。こういう団体を通じて強要されるいは推奨される研究（？）のなかからは、どうみてもたんに見せびらかすためとしか思えない「自作教具の製作」の研究とか、「思考力を高めるた

め」あるいは「研究の手引き」三訂版にもとづいた「実験学習」の研究というような、印でおしたように同じ研究題目しか生まれてこない。

また、こういう自主性のないサークル（自主性のないものをサークルとよんでよいかという本来の問題をここでは問わないが）の選ぶ研究テーマには、施設設備のまったくの不備、生徒と教師の安全を守るための条件の欠除、技術科教師の苛酷な労働条件など、切実な問題であるにもかかわらずその解決が当局側の責任に属する問題にはまったくふれない傾向がある。もちろん、学習指導要領に重大な疑問を投げかけるような、創造的な研究は生まれぬ。

このような経過を考えると、技術教育の研究をすすめるためには、まったく自主的なサークルの結成、自分のあたまでテーマを選び出す本来の自主的な研究態度が強く要請されねばならない。文部教研に対決する姿勢にしても、「自主・民主・公開」の原則がかりにかちとれたにしても、自主的に研究するというサークルの力量がなければ「自主的に」文部教研のなかにつつみ込まれてしまうおそれがないとはいえないのである。「研究ならば、文部教研でも組合教研でもよいではないか」という声がしばしばきかれるのでとくに一言しておきたい。

三

技術科の研究が半官製団体の活動に帰属しがちだということに関連して、技術科の研究ではとくに学習指導の技術的な方法についての研究が多かったことは反省されるべきである。「実験学習」の研究や、「自作教具」を授業のなかに取り入れるというような研究は、それ自体は悪いものではないし、授業をより効果的なものにするためには必要でもあろう。しかし、研究にたずさわる教師は、このような研究は、学習の内容（あるいは質）といつてよいかもしれない）を追求しているのではなく、方法を研究しているにすぎないという自覚をもつことは必要である。この点をはっきりしておかないと、学習指導要領に定められた内容を教えるためにそのでだてを研究しているにすぎないのに、自主的に内容を研究しているかのような錯覚をもつおそれがある。

ここ数年間の全国教研へ出されるレポートをみると、少しずつではあるが、技術科で教える中味についての研究が出されるようになってきた。そういうなかから、学習指導要領の定めている内容では、製図教育はまったく不十分であるとか、木材加工の時間数は不当に多いからもっと減らして金属加工をもっと重視すべきではないかとか、電気学習では、ラジオの製作やモーターの保守修理ではまったく不十分だから、電波の性質や真空管のはたらき、電磁力の基礎などはしっかり教えるべきではないかという

ようなことが、具体的に明らかにされるようになった。

それにもかかわらず、教える中味についての研究は、まだ全体としては大きな弱点になっているといわざるを得ない。金属加工や機械の学習ということは、金属加工の何を教えるのか、機械、い、ものの何を教えるのか、というような点についてのきまこまな研究をすすめる必要が強調されねばならない。

機械学習を例にとつていえば、学習指導要領が強調しているような分解組立に終止したのでは「：：しながら教える」も口でいってみたところで、実際には教師が教え生徒が学ぶという意味での教授過程はまったく成立していない、ということはどうほんどの教師が気づいていることなのではないだろうか。機械学習では「自作教具」をつくってみるといふようなこと以外には研究の余地がない、という状況は、学習指導要領や検定教科書にこだわる限りは必然的な結果なのである。

このような壁を破るには、一時間の授業のなかで、いったい教師は何を教えるのかという疑問をだいにすることが必要なのではなからうか。何を教えるのかという自覚がなければ、その授業は「教科書にしたがって流している」にすぎないということになるのではないか。もちろん、こういう疑問をつきすすめていけば、当然に、学習指導要領には機械につ

いての理論はうわべばかりで中軸になるものが書いてないところまで行きあたるにちがいない。そのことに気づくなら、教師自身が機械についてもっと深く学ぶ必要も生ずるはずである。

右のことは、技術科のどの分野についてもいえることである。技術科の場合、教える中味について研究しようとすれば、幅広い教材について研究するのは、一人の教師、一つのサークルにとつては困難なことである。一つの教材、一時間の授業について深くつっ込んだ研究をすべくやってみようということが研究の幅をひろげることになると考えるべきなのだと思ふ。

四

技術科の授業、とくに木工の授業で起こる災害をめぐる問題は、われわれの教研活動のなかでかなりつっ込んで研究されてきた。最近になって、広島県で、授業中に指を切り落とした生徒の父親が村を相手として賠償請求裁判を起しているという事実が明らかにされた。(くわしくは、原正敏「技術科災害に対する賠償裁判」『教育』六六年六月号をみてほしい。)これに対し、文部省や各都道府県教委は安全を維持するための具体的な措置をとろうとしないだけでなく、現場教師や子どもに責任を転嫁するような「通達」を出している。われわれは、こ

のようなまいったくらんぼうな非人間的な政策を具体的にばくろし、これとたたかってゆくことがだいじである。

安全問題にも関連するが、技術科教師におしつけられている労働条件の苛酷さ、二学級(の男子)を合併して授業を行なうことがまったくムチャであることなどを明らかにすることが必要であるし、このような悪条件をはねのけてたかかう方向を見出す努力が必要である。

ようやく昨年あたりから、技術・家庭科の「設備充実参考例」(産振法の基準だと思っているらしいがまちがいである)のもつ矛盾が指摘されるようになったが、正しく技術教育をすすめるためには、どのようなものが必要なのかという観点から検討することが必要であろう。

五

昨年度の全国集会で、半日間ではあったが高校分科会をもったことは、高校において「類型制」とよばれる差別的なコース制が強化されていることが具体的に明らかにされたことなど一定の成果があった。

今年中には中教審の「後期中等教育の拡充整備」についての答申が出るものと予想される。もちろん、すでに中間答申の段階から、「期待される人間像」の理念や徹底した差別的な多様化の方向は着々と現実のものとなりつつある。本年度の教研集会では、この答申が大きな関心

をよぶことが予想されるし、技術教育の分科会も例外ではあるまい。

右のことに関連して、技術教育の分科会で問題となる点は、中学校においては一年生から就職予定の生徒に職業科目を選ばせるといふ根本的に義務教育を破壊する方向、男女差別をいっそう強化しようとする方向、一部に六年制のエリート学校をつくろうとする方向があげられる。高校段階では、職業に関する学科の徹底した多様化、技能学科新設の構想・企業内訓練の高校教育化・企業内訓練との連携の強化等々独占資本の労働力政策としての露骨な要求が問題となるであろう。

われわれは、このような多くの問題が教育現場のなかにもどるよう具体的に現われているか、それが教育をどうゆがめているかを明らかにしたいし、そのなかからたまたかの方向を見出すよう努めたいと思ふ。

高校段階での問題をきまこまかく討論するためには、本年も高校分散会を設定することも必要であろう。